

# ヴィーダ・ダットン・スカダー：19世紀末アメリカにおける教育者、社会活動家、研究者の肖像

杉 山 恵 子

## Searching for Fusion between Socialism and Christianity---Vida Dutton Scudder: Life as College Professor, Social Activist and Scholar

Keiko Sugiyama

### Abstract

Vida Dutton Scudder was born in India, a daughter of a Congregational missionary. Focusing on her autobiographical writings and on her scholarly works, I will argue that her effort to reconcile newly-arrived ideals of socialism and Christianity and her quest for commitment to social justice represent the intellectual response amidst economic and social changes in the late 19<sup>th</sup> century America. Her inner thoughts and the progression of her religious awareness reached the conclusion assigning individual responsibility for the awakening of Christian social conscience for a vision of better world. She was able to harmonize a radical social thought and conservative religious undertaking. This study hopes to widen our understanding of America, and her difficulty both in undertaking any radical change in social system and her realization of social democratic ideals.

キーワード：ヴィーダ・ダットン・スカダー、カレッジ・セツルメント、ソーシャル・ゴスペル、社会主義

*Key words* : Vida Dutton Scudder, College Settlement, Social Gospel, socialism

## はじめに

ヴィーダ・ダットン・スカダー（1861-1954）は、インド、マデューラでアメリカ宣教師一家に生をうけ、その後ボストン、ウェルズリー大学で女子教育に携わりながら、当時の女性に開かれた可能性に挑戦し続けた、今では忘れられた女性の一人である<sup>(1)</sup>。スカダーの生きた19世紀後半のアメリカは南北戦争後、工業化、産業化が一気に進み、仕事を求めて大量の移民が入国した。移民の安い労働力を利用し、先住民制圧で手に入れた広大な大地の資源をもとに、巨大産業資本家たちが出現した。「金ぴか時代」とマーク・トウェインが名付けた商業主義、物質主義、功利主義の見せかけの豊かさの裏には、途方もない貧富の差、劣悪な都市環境とそれまでにない社会不安が生まれていた。民主主義を国是とするアメリカの体制は守れるのか。格差はどう是正されるべきか。不安を齎したのはそれだけではない。進化論に代表される科学思想の到来は、異教徒の移民の到来にもまして、キリスト教を基盤にしてきたアメリカにおいて、人々に危機感を生んだ。北部指導で進む再建、めざす国家再統一の中、国家のあり方そして個人の関わり方を模索する時代となっていくのである。スカダーがこの混乱期にまず現状打破の手段として選びとったのは、イギリス発の社会主義思想であった。イギリス留学時代に出会った、ジョン・ラスキンやウィリアム・モリスの社会主義の系譜である。かれらの足跡はアメリカにおいては、アーツ・アンド・クラフツ運動に代表される室内装飾とデザイン革新において、記憶されることが多い。しかし産業資本社会に飲み込まれるアメリカにおいて、その社会主義思想は、スカダーの中で特別な意味を持つようになっていった。人々が「階級闘争」と聞くだけで震えあがった時代である。しかし、イギリス発の社会主義は無神論者である必要はなかった。果たして社会主義との出会いはどのように展開されていったのか。<sup>(2)</sup>

埋もれていたスカダーを表舞台にだしたのは、スカダーが大学教育を受けた第一世代の一人であったことからであった。ボストンの改革史をまとめたアーサー・マンはスカダーのセツルメント活動をシカゴのジューン・アダムズと並び立つと位置づけた。<sup>(3)</sup>しかし、1960年代以降進む女性史研究のなかで、スカダーは忘れ去られた。ジューン・アダムズらが築きあげた、母子福祉を優先した政治力獲得のネットワーク、さらには、平和主義の活動から、

スカダーは外れていたからである。一方、スカダーを神学面から再評価しようとしたのがエリザベス・L・ヒンソン - ヘイスティヤスカダーの唯一の伝記を書いたテレサ・ココランの研究であった。<sup>(4)</sup>より神学研究に重点を置いたスカダー研究は、それまで男性中心で語られてきた社会的福音運動（以下ソーシャル・ゴスペル）を見直す方向へと進んだ。ことに、イギリス発の社会主義の動向をいち早く取り入れた聖公会の立場から、ソーシャル・ゴスペルの活動を、スカダーにみたのがピーター・J・フレデリックやバーナード・K・マークウェルであった。しかし、神学研究の側面や教会活動への注目は聖公会という狭い範囲内での影響力に終始し、多方面への展開や今日的意義が見えてこない。<sup>(5)</sup>一方、広く、近代の挑戦に応じた思想家研究において、スカダーにも言及したのがT・J・ジャクソン・リアーズであった。近代の到来に揺さぶられ、思考においてこそ対抗の可能性があるから見抜いたひとりがスカダーであると結論している。核心についてはいるものの、中世への憧れを増大し、過去に避難、退却することで、この激動の時期をやり過ぎた人物として切り捨てられている。<sup>(6)</sup>

たしかに多方面に研究は進んでいる。しかし、退却や引きこもりに終わらせてよいものか。この大変革期に、スカダーがどう問題の一つ一つに対峙し、選択し、何を切り捨てていったか、その過程がみえてこない。社会科学や社会主義の到来とキリスト教の伝統がせめぎ合う中、スカダーの言葉をかりれば、「社会主義とキリスト教の融合」<sup>(7)</sup>をなぜ、どのようにめざしたのか。

本論ではスカダーの社会主義思想の受容と変容を追うことで、アメリカ化の過程が見えてくることに着目した。最終的に大学における人格教育を語るスカダーと、最晩年まで教会の役割を説き続けたキリスト者としての使命の貫きかたをみることで、新しい思想をアメリカの伝統につなぐ姿がそこにあるとした。社会主義思想の到来を、来るべき未来への一段階、つまり思考の訓練の場と捉えなおした。それを経てこそその人格教育の重要性を大学教育の現場で訴えていった。社会主義が掲げる国家の一体感、平等を謳う新しい政治体制の可能性は、現実を見据える糧となって、目指す社会へ誘導する力として、格差と分断の危機を乗り越えるために、アメリカの風土に根付かせようとした。最終的には教会の土地所有放棄を提案した。社会システムとしての社会主義を目指したのではない。常に理想となる社会を求め続ける姿勢を人格教育の中心に置き換えていく立場は、結果的に社会主義をそぎ落とし、き

わめてアメリカ的な道をとることになる。しかし、その過程こそが、この社会科学の到来と、それまでの信念がせめぎあった時代のスカダーの解決策であった。

スカダーはよくこう言った。「私の居場所は中世かユートピアである」と。(8)この発言はアメリカに居場所を見つけ出していかなければならなかった苦悩を表現している。そしてたどりついたのが、理想とする社会を求めつづけよ、という結論であった。しかし、求めて挑戦し続けるという姿勢はいかにも精神の果敢さを謳う当時のアメリカの風潮と轍をひとつにしていたことを見逃せない。「ユートピアとは、膨張主義の世界観であるときこそ現れる」と自らが語るように、拡大する当時のアメリカがあってこそ、結論であったからである。スカダーの意義は、多くの研究者の語る、その後ろ向きの姿勢ではなく、失敗ですら貴い行為であると挑戦し続けるその前向きの姿勢にこそあるのである。(9)

本論ではまずは学生を対象にした講義録を通して、イギリスの社会主義思想をアメリカ社会に繋ぐ役割に心血を注いだスカダーを取り上げた。(10)次に小説を通して自分探しの経過を語った自伝を取り上げた。書くことは、説教壇から排除されていた女性の武器となった様子をうかがわせている。(11)最後は宗教関係者に宛てて書かれた研究書を取り上げた。それは「社会主義とキリスト教の融合」を追い求めた著作の数々であり、最後には、聖フランチェスコ修道会の働きを理想とするに至った。その遍歴は、近代へ移り変わる衝撃を真に受けた一人の成長と奮闘の記録であった。(12)

## 1. 生い立ち

スカダーは会衆派牧師であった父がインド滞在中に生まれた。地域に根差した熱心な活動を展開していたという。しかし生後わずか2ヶ月で父が河で水死したため、失意の母は母国アメリカ、マサチューセッツに帰国した。母方の豊かな資金援助で、幼少期からヨーロッパを旅した。ヨーロッパでの生活に後ろ髪を引かれたスカダーの思いは、入学したスミス大学の学生時代に執筆した学生生活を舞台にした脚本から伺い知ることが出来る。自由なアメリカに惹かれながらも、泣く泣く親の言いなりで帰国する日本人留学生が主役だからである。もっとも主人公のミツは、帰国後、後進国日本の婦女子の地位向上を目指す決意を語るところで終わっている。共通する思い、使命に

身を投じるものへのあこがれがあったに違いない。<sup>(13)</sup>スカダーは大学卒業後、再びイギリスに渡り、オックスフォード大学で学ぶ。そこで、出会ったのが、最晩年を迎えていたジョン・ラスキンの講義であった。<sup>(14)</sup>たちまち感化され、かれらの社会主義を標榜するようになる。当時のイギリスにおける社会主義思想は社会改革の最前線を担っていた。<sup>(15)</sup>オックスフォードの学生たちがかかわっていたトインビー・ホールを訪ね、改革を机上のものとして、実践と結びついていく活動に惹かれた。トインビー・ホールは自らもアメリカにおいて、その創設者の一人となるセツルメント活動の原点となった。

帰国後、スカダーはウェルズレー大学での職を得る。新米教員であった当初、講義ノートづくりに没頭した。女子教育を担う責任を語る真摯なその姿は、今日でも教職に就くものを感動させる。試行錯誤のなかでまとめた講義録が『イギリス作家の社会思想』（1898）であった。社会への関心へと視野を広げていく作家たちの系譜を学生たちに語る講義であった。貧しいものへの眼差しを持つと評価したトマス・モアから始まり、ジョナサン・スウィフトを経て、チャールズ・ディケンズ、T. S. エリオット、チャールズ・キングスレーへと続く。ことに力を入れるのは、1830年代から90年代、野放しの資本主義社会を批判した思想家たちであった。道徳的批判を展開するトマス・カーライル、審美的批判を展開するジョン・ラスキン、そして知的な議論へと構築したと評価するマシュー・アーノルドらであった。<sup>(16)</sup>

スカダーにとって、イギリスは重要な位置を占めていた。東海岸、ボストンの知識人家庭で育ち、おじにあたるホレス・スカダーが『アトランティック・マンスリー』の編集者であったことから、おじ同様、19世紀末の思想界での重責がスカダーに押し掛かっていたことだろう。アメリカが学ぶべき思想において、ページを割いているのは、ラスキンの国家的、道徳的自己犠牲、シンプルな生活、つつしみ深い消費を謳う姿勢である。牧師や兵士に期待される犠牲と献身をなぜ産業階級層に課せられないのか。当時の産業家批判が展開されている。またアーノルドの富の分配に関する箇所を取り上げ、社会主義国家へと導くその姿勢を高く評価した。自己犠牲やシンプルな生き方へのあこがれ、思想家への信頼、リーダーシップ像の模索、富の分配への関心は後のスカダーに引き継がれている。しかし、カーライルの持つ権威主義の容認、ラスキンの家父長制、および前近代社会への傾倒、アーノルドの

民主主義への隠れた恐れを喝破し、批判の矛先を向けている。そして彼らの診断は評価するが処方箋がないとし、実現に向けて行動できないと断罪した。<sup>(17)</sup>

作家や思想家の使命は民衆と共に歩み、行動することであると、文学者・思想家の理想像を教壇から訴えていた。のちに労働ストライキを支援し、その進退を問われた時、学生を煽る授業として、大学当局から禁止されたのがこの授業であった。<sup>(18)</sup>

当然のことながら、教壇から実践の意義を語るスカダーの次の行動は、自らが外の活動に飛び込むことであった。<sup>(19)</sup>

## 2. セツルメント

教員としての知的関心と使命感は講義を通して満たされたものの、現実感、生きている証への渴望はオックフォード時代から続いていた。19世紀を通して語られる、中産階級の白人女性達の無力感、それをばねに婦人クラブなどのネットワークを造り上げていく、女性史ではハイライトとなるこの時代の背景である。スカダーも同じ意識、関心を持つ女性達と、自らイギリスで体験したセツルメントをアメリカに創設することで、悶々とした実感のなさを払いのけようとした。<sup>(20)</sup>

それは、1892年、スミス、ウェルズレー、ラドクリフ、バツサー、プリンマーら女子大学の卒業生がニューヨークの貧しい移民居住区に開設したカレッジ・セツルメントに結実した。スカダーはボストン支部となるデニソン・ハウス創設のために、大学を休職して尽力し、その後20年の長きに渡り関わり続けた。<sup>(21)</sup>

セツルメント創設に関わり、社会主義を標榜する団体に接近し、さらに労働組合員との交流は、すでに大学でも問題となっていた。それが顕在化したのが、企業倫理を問うこともなく、スタンダード石油会社のロックフェラーから大学が資金援助を受けた時のことであった。汚れた資金を受け取ったと批判したために、理事長や教員仲間との間で進退が問われたのである。1900年のことである。<sup>(22)</sup>

大学でのスカダーの立場を知るには、スカダーが後に語った、セツルメントの友人を大学に講演者として呼んだ折のエピソードにも見られる。たとえば、デニソン・ハウスで知り合った、ケニー・オサリバンの夫、ジャック・

オサリバンを大学に呼んで、講演会を催したときのことだ。ケニー・オサリバンはシカゴのセツルメント、ハルハウスで労働運動の中心的役割を担っていたが、結婚を期にボストンに移り、夫と共に、活動を展開していた。階級を越えた女性労働支援の運動を展開した婦人労働組合同盟（WTUL）を率いる中心的人物のひとりで、デニソン・ハウスではケニーの子どもを預かり、ケニーが組合活動に専心できるように支援した。その中心がスカダーだったのである。

アメリカ労働総同盟の支部長であったジャック・オサリバンは教員組合を提案し、傍観者ではなく、当事者となることを勧めて、労働運動の支援を要求した。しかし一部の教員を激怒させる結果となり、他の教員たちの反応も冷やかだった。労働者との連帯感をうわべだけ味わいたい教員たちであった、と後にスカダーはオサリバン来訪時を自伝で述懐している。<sup>(23)</sup> もっとも、ケニーら労働運動側も、階級意識のない白人中産階級との連帯が疑問視されていく中であつたことも重要であろう。<sup>(24)</sup>

しかし、あれほどの意気込みで教職についたものの、大学での居場所のなさに、精神的に追い込まれていたスカダーにとって、精神療法となったのが、自伝的小説、『バベルの聞き手』の執筆であった。<sup>(25)</sup> 会話で進行する場面展開は、まるで演劇部の脚本のようである。ヒルダという、スカダー自身がモデルの主人公の成長を追って、出会いが語られ、それが転機を呼ぶ。社会的責任に覚醒する新しい自分が語られていく。<sup>(26)</sup> まずは大学環境への失望と、大学教員たちの諦観、無気力さ、彼らへの絶望から始まる。知性の停滞が、新しい時代のアメリカ民主主義作りを阻むものとして、鋭く非難されている。知的指導者になれない大学教授たちへの批判はのちに、関心が教会主導の社会改革へと向うことを暗示している。<sup>(27)</sup>

労働組合の仲間たちへの批判も続く。未熟練労働者を拒む白人男性組合員たちの偏見を非難している。未熟練労働者の大半が移民だったからである。組合の指導者の保身が主人公ヒルダのターゲットであった。大学と同様、事なかれ主義の集団として、苛立ちと失望を露にしている。<sup>(28)</sup>

次のターゲットは既成の教会であった。ここでも、社会の底辺層への無関心、異教徒の移民労働者たちへの理解不足を厳しく糾弾している。しかし、移民と寄り添う例外的な人物が一人登場している。のちに伝記を執筆することになる移民街で活動する、ソーシャル・ゴスペルの代表的神父、ファー

ザー・(O・T・S) ハンティングトンを思わせる人物である。失望や憤りを繰り返すなかで得られた社会への覚醒と使命を語って、主人公ヒルダは改革を求め続ける覚悟で自伝は終わる。<sup>(29)</sup>

その後のスカダーの選択はデニソン・ハウスを退き、社会党に入党することだった。1911年のことである。革新主義と呼ばれた改革運動の最盛期、社会主義への寛大な世論も後押ししていたことだろう。そしてその翌年、関わったのが、人間らしい生活と尊厳を要求する、「パンとバラ」のストライキと呼ばれた、世界産業労働者組合(IWW)主導のマサチューセッツ、ローレンスのストライキだった。ストライキは成功に終わるが、スカダーが行ったストライキ支援の演説は、現役女性大学教員のストライキ支援として、新聞を賑わすこととなり、大学でのスカダー下しに拍車をかけた。繊維産業を長年牽引してきたローレンスの繊維工業ストライキは、移民労働の環境悪化を如実にあらわすもので、労働時間の短縮を受け入れた企業主が露骨な給料カットで対応したことに端を発している。支援の輪が広がり、労働者の子どもたちを支援者が預かるなど、いまだかつてない展開を見せたことでも知られる。<sup>(30)</sup>スカダーは、「法への遵守、非暴力、民主主義の自由を求める思想」を謳ったものだったと、ストライキの穏健さと正当性を強調してのちに、自身の行為を振り返っている。大学理事の一人であった母方のおじ、E.P.ダットンの介入で解雇を免れたものの、その代償が、先にのべた、学生を煽ると非難された社会改革思想の授業の閉講であった。<sup>(31)</sup>

教壇を奪われ、精神的に追い込まれていたこの時期の支えが、当時の新しい教会の動向であった。すでに父方のピューリタンの伝統からは離れ、母方の聖公会のもとでの信仰生活であったスカダーは、ボストンにおける聖公会のソーシャル・ゴスペルの指導者W・D・P・ブリスに引かれていった。<sup>(32)</sup>

### 3. 教会改革と理想社会

スカダーはセツルメント活動を通して多くの団体に加わっていたが、なかでもその精神的な支柱は、聖十字友の会(コンパニオン・オブ・ホーリー・クロス)であった。ソーシャル・ゴスペルは19世紀末の社会変化を受けて、改革の時代といわれる、革新主義運動の一翼として語られることも多い。異民族、異宗教の到来に背をむけ、教会改革を拒む保守的な教会を飛び出して独自の運動を繰り広げ、改革を後押ししたと指摘される。代表としてあげられ



るのがバプティストの牧師であったウォルター・ラウセンブッシュ、プロテスタントの運動とみなされがちだが、カトリックにおける運動を代表する、ジョン・A・ライアン、聖公会では、スカダーの寄った、W・D・P・ブリスであった。ブリスはスカダー同様、会衆派に属していたが、教派主義で争う当時の教会を離れ、より統一を強調する聖公会に移っていた。聖十字友の会は聖公会での女性支部であり、大学やセツルメントとは異なる世界観を形作る場をスカダーに与えた。変革期における教会への信頼は、のちに聖人の伝記に結実した。聖十字友の会でのかかさぬ祈りの中で、迷いを鎮め、個人主義を戒め、自己犠牲や無償の慈愛にひかれるスカダーの姿を見せている。社会の混乱期にどのような方法で改革を進めるべきか、社会構造の変化を一方で模索しながら、聖職者のリーダーシップを切望する姿がそこにある。(33)

聖人像に惹かれるその姿は、ヨーロッパでの体験を背景に、初期のころからみられた。最初の自伝的小説執筆時にほぼ同時進行で進められていたのが、シエナの聖カテリーナの研究であった。ルターにも匹敵する人物として取り上げ、1905年に書簡集を編集し、解説を施した。恐れず、腐敗を許さぬ、殉教にいたるその姿は、若いスカダーを魅了した。聖カテリーナが救いを得る過程をまるで自らの体験のように解説し、覚醒体験の重要性を訴えている。さらに、母性や女性性ではなく、知性の勝利として、聖カテリーナを解説した。書簡集では、失敗を恐れず、諦めずに戦い続けることを語り、相談者の恐れを払拭する姿に焦点が当てられた。たとえ成し遂げられなくても、失敗は神への犠牲の証とみなす思想が顕著であるとスカダーの解説を評したマークウェルは結論している。スカダーの背負ってきたもの、出自の重み、使命感から来る焦り、挫折体験のすべてを軽減させたカテリーナ研究であったことが伺える。(34)

さらに、スカダーが退職後、長年の思いを形にしたのが、聖フランチェスコ修道会の研究であった。聖フランチェスコ像ではなく、どのように、修道会は護られ、しかし崩壊して行ったかを探ろうとした。そこに、今日的な意義を見つけ出そうとした。そこには、社会に覚醒した、無欲な共同体、無償の愛を注ぎ続ける共同体への憧れがあった。修道会が直面した困難と同様の時代だからこそ修道会の足跡から学ぼうとした。その核心が富の所有が手放せない現実社会との格闘であった。オックスフォード時代にラスキンに出会って以来続く、自己犠牲へのあこがれはここにおいてさらに明確となり、

社会を変える根源が聖職者の自己犠牲に倣うかたちへと結実していくのを見せている。<sup>(35)</sup>

聖フランチェスコ修道会への関心はスカダーがことあるごとに自分に課された時代の使命として掲げてきた、「社会主義とキリスト教の融合」を求めた結果、立ちあらわれた理想の集団として理解することが出来る。社会党に入党し、社会主義の掲げる平等社会の未来に希望を見出す一方、自らを支えてきたキリスト教信仰との融合を突き詰めていた時期に書かれた、『社会主義と人格』(1912)はすでにスカダーの結論を予測させている。そこで語った、理想的な社会主義社会とそれを支える個人の人格の覚醒がこの集団の根底にあるからである。社会全体を視野に入れ、よりよい社会をめざして、社会を変革しようとするその姿勢こそが、社会主義から学ぶべきものであった。それにはそれを支える人格的に覚醒した集団がなければならない。覚醒した人格の取る富の放棄の実践こそが、社会の根底に確認されねばならない。スカダーのいう「融合」とはそのような形をいうのであった。スカダーは社会主義の実現には走らなかった。反マルクス主義であったと多くの研究者が語る。プロレタリアートだけが担う社会改革はあり得ないからであった。全員が関わる変革でなくてはいけないのであった。社会主義思想の根幹が、富の分配がもたらす不安のない世界ならば、それは目指すに値する世界観であった。しかし、金銭的な平等社会は高潔さを保証はしない。そこでは自己犠牲や、富の放棄、清貧を尊ぶ人格の覚醒、人格の形成こそが立ち現われなければならなかった。それが、「融合」が意味する社会主義の精神化、キリスト教の社会化であった。それこそがアメリカが学ぶべきものであった。社会主義国家を捨て去った瞬間であった。アメリカを確固としたキリスト教国へと導く決意であった。<sup>(36)</sup>

さらに現実世界での実践例として、ハンティングトン神父の業績を取り上げた。中世の修道会をアメリカで蘇らせ、しかも、ローマに頼らず、アメリカへの愛国心を貫いたとして高く評価した。労働運動の支援、児童労働への反対運動、テナメントと呼ばれた最悪の移居住環境改善運動など、実践力への評価も高い。また同じニューイングランドの血を引き、ピューリタンからユニテリアンへの改宗、さらには、修道会の創設に及んだ精神の遍歴もスカダーに似るものがある。社会主義を特権の廃止と読み替え、キリスト者としての改革運動を進めることも、スカダーにとって同志であった。この人物

伝でスカダーがページをさいたのは、聖フランチェスコ修道会でも中心をなす、修道会における貧困の誓いであった。ボランティア貧困と呼ぶその姿勢の実現の困難さをここでも確認しながら、しかしあくまで富の放棄、清貧こそが、近代の到来に対抗出来る、来るべき社会の根底に据えるべきであるとスカダーは揺るがなかった。<sup>(37)</sup>

アメリカ社会の根底を揺るがしかねない主張を試みていたにもかかわらず、その一方、スカダーのアメリカ礼賛を伝える箇所がある。それは、ハンティングトンの修道会の運営が自由であると称えたところだ。それが自律に基づくもので、決して、修道会が全体主義的ではないと言及している。そして後にアメリカの国歌とも並んで歌われる、「美しきアメリカ」の歌詞を引用し、ハンティングトンがそこで謳われるアメリカの伝統的自由を重んじた価値観の上に修道会活動を展開したと結んでいる。決して強要されない、自律の中にある自由こそがアメリカの称える自由であることを、ハンティングトンの人物像を通して確認、強調するスカダーである。最終的には個人の魂の導き手としての道を選んだとハンティングトンを評価、そして個人の覚醒こそが社会が変わる源流を作り出すとその活動を最終的に評価した。ここでも社会構造の変革を求めて始まった模索が、個人の自己変革、自己犠牲への奨励になっている。<sup>(38)</sup>

最後に、避けて通れないスカダーに言及しなければならない。社会構造の改革を退け、個人の人格形成による理想社会の到来へと、社会主義の精神化、キリスト教の社会化という「融合」を導き出しながらも、小骨のように著作に刺さり続けているのは、社会主義思想の根幹でもあった土地分有の実現であった。単なる土地の分有は高潔な、道徳的な社会の保証にはならない。それはまず教会が率先して取り組むべき問題ではないか。

スカダーの教会土地所有放棄の思想は晩年になってより明確になった。80歳を越える高齢で書かれた文書は、「聖公会の考える教会の土地所有」と題され、『キリスト教と富』（1947）に収められている。スカダーに献辞されていることで、聖公会がその功績を評価した姿勢をみせている、と同時に、スカダーがこの高齢まで持ち続けた教会主導による改革への強い期待が感じられる。第一次大戦の到来とともに、勢いを失ったとされるソーシャル・ゴスペルがこうして女性指導者を通して、語りつがれていたのであった。<sup>(39)</sup>

この著作においても、教会が慈善活動でやり過ごし、本質的な問題をない

がしろにしてきた姿勢を取り上げ、貧しい移民労働者を見放し、彼らの労働運動を静観する姿勢への批判が続く。そして、教会が担うべき根本とは、貧しいもの、弱き者たちへの責任であり、神の国への実現に立ち返れというものだった。そのためにも教会主導での土地所有の放棄、土地活用を進めよというものであった。出版された1947年という冷戦初期、これまでもそうであったが、この時期においても政治力は放棄し、教会こそが社会構造の変化を希求すべきという。アメリカ社会を震撼させていた、冷戦状況には全く言及がない。むしろそうした時代だからこそ、戦争も国家も世界スケールで乗り越えるべき役割はいまこそ、キリスト教会の使命であると叱咤激励している。<sup>(40)</sup>

当時、アメリカは戦後の経済的豊かさの絶頂期である。そのような中で富の分有、富の放棄を謳うものに、誰も耳を貸さない。そもそも、アメリカが独立宣言で謳う自由とは、富の獲得と不可分ではなかったか。19世紀後半の改革運動とは、巨大資本に対抗して、個人、あるいは小規模事業主の私有財産を守る戦いではなかったか。そしてその自由は、豊かな消費行動と結びついて謳歌されていったのではなかったか。かつて第一次世界大戦後、改革の機運が萎んだ折に、諦めることなく「第2、第3、第4の風が吹くのを待ちましょう」と友人に書き送っていたスカダーだった。しかし、もはや、風が吹くことはなかった。<sup>(41)</sup>

86歳という高齢で書かれたスカダーの土地所有論はその現実性というよりは、社会主義の理想とキリスト教の使命の融合を、冷戦期においてまで、希望の源として、アメリカ社会に訴えた姿として注目すべきであろう。退却や逃避するイメージで語られてきたスカダーが最後まで声を挙げて「融合」とその先に有るものを追い求め続けた姿である。混乱期にハイブリッドな思想を生み出すことを強要された時代の生き証人がここにいる。そして、言葉の力だけでは、世界が変わらないことも承知していた上で実践しなければならない課題があることを語っている。富を手放した清貧の小さき共同体への憧れ、富を分かち合うユートピアを希求し続けながら、スカダーは最後まで社会党員の党員証を持ち続けた。<sup>(42)</sup>

おわりに

前述の、国歌にも等しいと親しまれている、「美しきアメリカ」の作詞者、

キャサリン・ベイツは大学教員時代のスカダーの同僚であった。自律の自由を歌うその歌は、実は壮大なアメリカ建国史観に貫かれている。ピュリタンの伝統の地から、建国の父たちへ、彼らが造り上げた自由の伝統とその精神が大平原を渡り、ロッキー山脈を越え、太平洋にまでたどり着く。その開拓の様をアメリカの大地の美しさ、雄雄しさ、季節の移り変わりとともに歌い上げたものだ。それは東部入植者から見たアメリカ発展史であり、先住民の歴史や南部史、さらには東進したアメリカ史を知る今日では受け入れがたいものである。しかし、ベイツを称えるスカダーには、ベイツ同様の、白人アメリカの未来への信頼、アメリカの希望が横たわっている。その伝統を紡ぐためにも、スカダーの発想のなかには、共同体の再生こそがアメリカをふさわしい姿に導くものとして揺るぎない形を残している。

大学教員、社会活動家、研究者、変革期におけるこれら三つ巴の役割のなかで、スカダーが行き着いたのは、融合という名の社会主義思想の飲み込み方であった。そしてそれを、教壇から、さらに教会活動を通して語り続けた。その姿には、アメリカで目指す社会改革が果たして社会システムの変更に至るのか、あるいはあくまでも個人の自己変革によって成し遂げられることを理想とし続けるのか、今日のアメリカを考える上でも避けて通れない両天秤に載せられた問いが横たわっていることが見えるだろう。スカダーの選択は著しく後者に比重が置かれ、後の遺産となっていくことも見えるだろう。

## 注

- (1) スカダーの私信は処分されており、資料は以下に分散されている。Vida Dutton Scudder Papers, 1883-1979, Sophia Smith Collection, Smith College, Scudder Papers, The Wellesley College Archives, College Settlement Papers, Smith College, Denison House, Records, 1890-1984, Schlesinger Library, Radcliffe, Harvard University.  
本論では著作中心にその遍歴をおった。
- (2) Eileen Boris, "Dreams of Brotherhood and Beauty: The Social Idea of the Arts and Crafts Movement," in Wendy Kaplan, *"The Art that is Life": The Arts and Crafts Movement in America, 1875-1920*, Boston: Little, Brown Co. 1987.
- (3) Arthur Mann, *Yankee Reformers in an Urban Age*, Cambridge, MA: Harvard University Press, 1954, William L. O'Neil, *Everyone was Brave: A History of Feminism in America*, N.Y.: Quadrangle, 1969.

- (4) Elizabeth L. Hinson-Hasty, *Beyond the Social Maze: Exploring Vida Dutton Scudder's Theological Ethics*, New York and London: T & T Clark International, 2006, Teresa Corcoran, *Vida Dutton Scudder*, Boston: Twayne, 1982, Wendy J. Deichmann Edwards and Cardyn De Swarte Gifford Eds. *Gender and the Social Gospel*, Urbana and Chicago: University of Illinois press, 2003, Christopher H. Evans, *The Social Gospel in American Religion: A History*, New York: New York University Press, 2017.
- (5) Peter J. Frederick, *Knight of the Golden Rule: The Intellectual as Christian Social Reformer in the 1890s*, Lexington, Kentucky: The University Press of Kentucky, 1976, Mary Sudman Donovan, *A Different Call: Women's Ministries in the Episcopal Church 1850-1920*, Wilton, CT: Morehouse-Barlow, 1986, Bernard Kent Markwell, *The Anglican Left: Radical Social Reformers in the Church of England and The Protestant Episcopal Church, 1846-1954*, Brooklyn, New York: Carlson Publishing Inc., 1991.
- (6) T. J. Jackson Lears, *No Place of Grace: Antimodernism and the Transformation of American Culture, 1880-1920*, Chicago: The University of Chicago Press, 1981.
- (7) Vida Dutton Scudder, *On Journey*, New York: E.P. Dutton and Co., 1937, p. 171, p. 191. 著作を通して、fusion, co-operation, reconciliation が使われている。
- (8) *On Journey*, p. 126.
- (9) *On Journey*, p. 137. 膨張主義に言及しているのは、Scudder, *Social Ideals in English Letters*, Boston: Houghton, Mifflin and Co. 1898, p. 331.
- (10) Vida Dutton Scudder, *Social Ideal in English Letters*, Boston: Houghton, Mifflin and Co. 1898.
- (11) Vida Dutton Scudder, *A Listener in Babel: Being a Series of Imaginary Conversations*, Boston: Houghton, Mifflin and Co. 1903とVida Dutton Scudder, *On Journey*, New York: E. P. Dutton and Co., 1937は対照的な自伝の形を取っている。前者は自分探しの姿を、後者は振り返って正当化する過程を語る。最後に探し求めた結果が立ち現われたと語ったのはVida Dutton Scudder, *My Quest for Reality: Wellesley---By the Author*, Saint Albans, Vermont: At the North Country Press, 1952.
- (12) Vida Dutton Scudder, *Saint Catherine of Siena as Seen in Her Letters*, London: J. M. Dent and Co., 1905、Vida Dutton Scudder, "The Franciscan Adventure," *The Atlantic Monthly* 145, June, 1930, 808-19.
- (13) *On Journey*, pp.10-14. VDS and FMB (Frona M. Brooks), *Mitsu-Yu Nissi, or Japanese Wedding*, Boston: H.A. Young. Co., 1888. ミツは「奴隷のような日本女性を高めな

- ければ、」と決意している。日本観、ジャポニズムの影響が顕著な作品でもある。
- (14) *On Journey*, p. 65.
  - (15) *On Journey*, p. 78, p. 91. Edward Norman, *The Victorian Christian Socialists*, Cambridge: Cambridge University Press, 1987, James Dombrowski, *The Early Days of Christian Socialism in America*, New York: Octagon books, Inc. 1966, Stuart Eales, *After Ruskin: The Social and Political Legacies of A Victorian Prophet, 1870-1920*, Oxford: Oxford University Press, 2011.
  - (16) *On Journey*, p. 103, pp. 121-123. 一方的な講義を退け、「グループ思考の芸術となる授業」を目指す語り、授業前に緊張しない教員はその資格がない、と言い切っている。*On Journey*, pp. 147-148.
  - (17) Vida Dutton Scudder, *Social Ideals in English Letters*, p. 205, p. 210.
  - (18) *On Journey*, p. 189.
  - (19) *On Journey*, p. 155.
  - (20) Allen F. Davis, *Spearheads for Reform: The Social Settlements and the Progressive Movement, 1890-1914*, New York: Oxford University Press, 1967, Barbra Miller Solomon, *In the Company of Educated Women: A History of Women in Higher Education in America*, New Haven, CT: Yale University Press, 1985, Carroll Smith-Rosenberg, *Disorderly Conduct: Visions of Gender in Victorian America*, New York: Oxford University Press, 1985.
  - (21) *On Journey*, pp. 146-150.
  - (22) *On Journey*, p. 181.
  - (23) *On Journey*, p. 156.
  - (24) Nancy Schrom Dye, *As Equals and As Sisters: Feminism, The Labor Movement, and the Women's Trade Union League In New York*, Columbia: University of Missouri Press, 1980, Kathleen Banks Nutter, *The Necessity of Organization: Mary Kenney O'Sullivan and Trade Unionism for Women, 1892-1912*, New York and London: Garland Publishing Inc., 2000.
  - (25) Vida Dutton Scudder, *A Listener in Babel: Being a Series of Imaginary Conversations*, Boston: Houghton, Mifflin and Co. 1903, *On Journey*, p. 79.
  - (26) 今日ではソーシャル・ゴスペル小説といわれるものであろう。Randi R. Warne, *Literature as Pulpit*, Waterloo, Ontario, Canada : Wilfrid Laurier University, 1993.
  - (27) *Lister in Babel*, Chapter 3, Academic Mind, p. 57. p. 60.

- (28) *Lister in Babel*, Chapter 9, The Labor Leader
- (29) *Lister in Babel*, Chapter 8, A Talk with Pastor, O・T・S・ハンティングトン神父をおもわせる、神父との出会いはp. 252.
- (30) Robert Forrant and Jurg Siegenthaler Eds. *The Great Lawrence Textile Strike of 1912*, Amityville, New York,: Baywood Publishing Co, Inc., 2014.
- (31) *On Journey*, p.187, “For Justice Sake,” Apr. 6 1912, *Survey*, pp. 77-79. 「サーヴェイ」はスカダールの穏健な内容を知らせるため、全文を掲載した。
- (32) ソーシャル・ゴスペルに関しては、近年、それまでの関心のなさから一転、多方面の影響力とその可能性をみる方向に変わってきている。前掲Christopher H. Evans, *Social Gospel in American Religion: History*, 2017. 本論でもその社会的関心と地上におけるユートピア実現の夢、それがアメリカ社会において可能であるとする共通信念がアメリカのナショナリズムを形作っていく点を重要視し、スカダールにもそれをみている。革新主義運動との動向を中心にみたものに、Donald K. Gorrell, *The Age of Social Responsibility: The Social Gospel in the Progressive Era 1900-1920*, Macon, Georgia: Mercer University Press, 1988. ジェンダールの視点からその影響力を確認し、さらに今日までつづくアフリカ系アメリカ人の教会活動に言及したものに、前掲Gender and the Social Gospel, Susan Hill Lindley, “Neglected Voices and Praxis in the Social Gospel,” in *The Journal of Religious Ethics* 18 (Spring 1990): 75-101. 社会学誕生のルーツをみるものに、Joyce E. Williams and Vicky M. Maclean, “In Search of the Kingdom: the Social Gospel, Settlement, Sociology and the Science of Reform in America’s Progressive Era,” in *Journal of History of the Behavioral Science*, Vol.48 (4), Fall, 2012, pp. 339-362.
- (33) *A Different Call*, pp. 147-53, T. J. Jackson Lears, *No Place of Grace*, pp. 209-215.
- (34) Vida Dutton Scudder, *Saint Catherine of Siena as Seen in Her Letters*, London: J. M. Dent and Co., 1905, pp. 1-17, *On Journey*, pp.241-244, Markwell, *The Anglican Left*, pp. 199-205.
- (35) Vida Dutton Scudder, *The Franciscan Adventure: A Study of the First Hundred Years of Order of St. Francis of Assisi*, London: J.M. Dent and Co., 1931, Vida Dutton Scudder, “The Franciscan Adventure,” *The Atlantic Monthly* 145, June, 1930, 808-819, *On Journey*, pp. 311-329.
- (36) Vida Dutton Scudder, *Socialism and Character*, Boston: Houghton, Mifflin and Co. 1912, p. 94, p. 108, Vida Dutton Scudder, “Socialism and Sacrifice.” *The Atlantic Monthly* 105,



June, 1910, 836-49, Lears, p. 213.

- (37) Vida Dutton Scudder, *Father Huntington: Founder of the Order of the Holy Cross*, New York: E.P. Dutton and Co. 1940, p. 113. p. 286, p. 293.
- (38) *Father Huntington*, p. 303, p. 317, Lynn Sherr, *America The Beautiful: The Stirring True Story Behind Our Nation's Favorite Song*, New York: Public Affairs, 2001.
- (39) Vida Dutton Scudder, "Anglican Thought on Property," in Joseph F. Fletcher Ed. *Christianity and Property*, Philadelphia: The Westminster Press, 1947, pp. 124-150.
- (40) "Anglican Thought," p. 145, *The Anglican Left*, p. 240.
- (41) Vida Scudder to Ellen Gates Starr, Feb 26, 1922, Quoted in Corcoran, p. 68.
- (42) Scudder, Vida Dutton Scudder, *My Quest for Reality: Wellesley---By the Author*; Sheryl A. Kujawa-Holbrook, "Introduction of Vida Scudder, 'Social Teachings of the Christian Year'," *Anglican Theological Review*, Jan. 1997, pp. 5-7.